

私立大学の視点から捉えた 大学評価について

工藤教和
慶應義塾大学
日本一ノルディック公開シンポジウム
2006年9月28日

評価づくめ？ 評価疲れ？

- 自己点検・評価(1991～)
- 外部評価
- 認証評価(2004～)
- 評価による財政支援や助成(高等教育に関する公的支出の20%以上)

私立大学の一員として、敢えてこのような状況について簡潔な意見を述べる。

私立大学全体の意見を代表するものではない。

私立大学について(1)

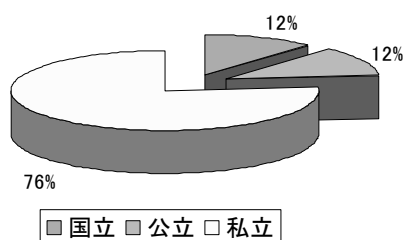
日本独特と言える伝統的な考え方: 大学を設置形態によって区別(分類ではない)

- 国立
- 公立
- 私立

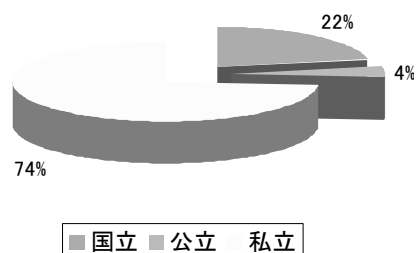
3

私立大学について(2)

学校数



学生数



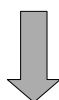
短大を除く
2006年5月1日現在

4

私立大学について(3)

教育と研究活動を通じて、社会および公共の福祉に貢献。

教育を受けた人々の社会への貢献。



公的な領域における私的な営み

5

私立大学について(4)

主として民間部門によって資金調達: 授業料、寄付、基金および事業活動からの収入

政府の補助金: 約10%



社会への貢献を続ける唯一の方法は、公衆から得るサポートのみである。どのように人々を納得させるかが重要な問題である。

6

慶應義塾について(1)



- 知的指導者であり先見性のあった福沢諭吉が1858年に創始
- 日本最古の私立大学の一つ。2008年に創立150年を迎える
- 総合的な教育制度
(小学校から大学院レベルまで)
- 全キャンパスのメディアセンターを合わせると、370万冊を超える書籍・刊行物を収蔵

7

慶應義塾について(2)

- 7キャンパス
 - 日本国内: 三田、日吉、矢上、信濃町、湘南藤沢(SFC)
 - 海外: 慶應義塾ニューヨーク学院(米国)
- 9学部、11研究科(大学院)
 - 慶應義塾大学大学院経営管理研究科(KBS)は国内随一
 - 2005: 健康マネジメント研究科設立
 - 2004: 法務研究科(法科大学院)設立
- 8附属小・中・高等学校
- 3海外オフィス(米国、英国、韓国)

8

慶應義塾について(3)
教員と学生 (2005年5月)

■ 教職員3,600人

教授	718
助教授	342
講師	270
助手	479
職員	1,798
合計	3,607

■ 学生3万2,000人

学部生	27,971
大学院(修士課程)	2,712
法科大学院	507
博士課程	1,093
合計	32,283

9

慶應義塾について(4)
入学と学位授与

■ 新入学生数(2005年)*

	学部生	大学院生
慶應学内からの入学**	1,424	1,220
慶應学外からの入学	5,054	502
Total	6,478	1,702

■ * 通信教育生は含まず

■ ** 慶應附属高校卒業生の71%が慶應の学部課程に入学

■ ** 慶應で学部課程を修了した学生の97%が大学院のいずれかの研究科に入学

■ 学位授与数(2004年)

大学(学士)	6,747
大学院(修士)	1,087
大学院(博士)	226

10

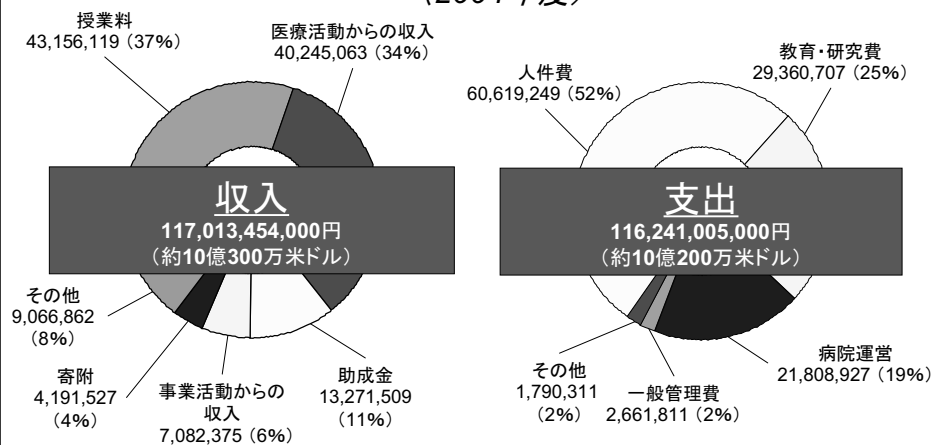
慶應義塾について(5) 財務

- 2004年度キャッシュフロー
 - 1,690億1,494万円(約15億米ドル)

- 信用格付け
 - スタンダード&プアーズ社(米国): AA: 安定的
 - 格付投資情報センター(日本): AA+

11

慶應義塾について(6) 財務: 収入と支出 (2004年度)



12

高等教育の現状に関する基本的理解(1)

高等教育の国際市場における激しい競争

- OECD加盟国では市場が飽和
- アジアの急成長市場へ機関が国境を越えて進出
- 技術的進歩:eラーニング、OCW等
- 国際言語としての英語の強み



教育力に知的価値をいかにして付加するか

13

高等教育の現状に関する基本的理解(2)

国内市場での競争

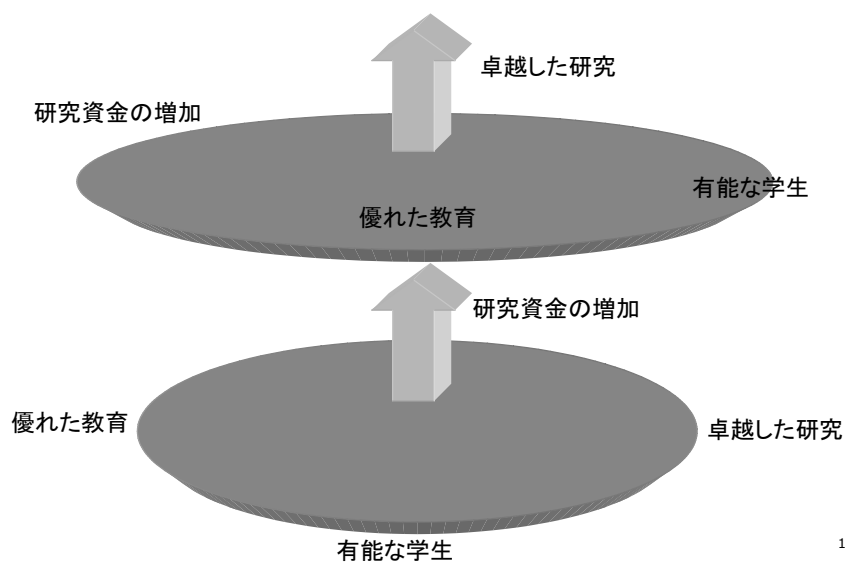
- 人口統計上の変化:18歳人口の減少
- 高等教育に対する需要の多様化:多年齢化と多様な社会的背景
- 規制緩和に応じて1990年代から「大学」が急増
- 国立大学の独立運営
- 非価格競争——教育の質における競争



いかにして独自の強さを身につけるか
いかにして相応しい市場を見つけるか

14

競争環境で生き残り成長するための改革



15

競争への参画

- 質保証: 多様性は私立大学の必要不可欠な要素であるが、比較可能な基準に立ったうえでの多様性でなければならない
 - 欧州のボローニャ・プロセス
 - UNESCO/OECDガイドライン
 - 認証評価
- 透明性: 大学の財務情報を含め、偏った情報の提供から脱する

市場に留まるための必須要素

16

評価の2つの側面

1. 教育機関、特に私立大学についてはその強みを示す貴重な機会
教育における強み：例えば一般教養教育なのか、専門教育なのか？
研究における強み：例えば科学なのか文学なのか？
2. 改革の出発点としての評価
教育および研究制度を改革しようとする継続的な努力は、市場で生き残るために最も必要とされる要素である

17

改革の出発点としての評価 評価の4段階

1. 成果の自己点検・評価：全部門の現状に関する共通認識
2. 外部アドバイザーによる外部評価：内部評価を客観化する
3. 認証評価：公に改革を約束する
4. 改革に向けた行動

18

慶應義塾の例(1)

さまざまな委員会、学部・学科等により、自己点検・評価は継続的に実施されてきたが、2003年までは自己点検・評価のための全学的な組織はなかった。

例:

ビジネススクールの外部評価団体

湘南藤沢キャンパスが先駆

自己点検・評価という観点を持つ慶應イヤーブック

個別学部報告書と外部アドバイザー

19

慶應義塾の例(2)

2003 全学的な自己点検・評価委員会を組織
形式と方法について討議

2004 自己点検・評価作業
「報告書暫定版」の提出
外部評価委員会

2005 日本の認証評価に申請
大学基準協会から自己点検・評価報告書の最終版を受領

2006 大学基準協会からの評価報告書
認証評価を取得
教育改善のために学部及び大学教育委員会
にフィードバック

20

慶應義塾の例(3)

慶應義塾に関する大学基準協会の評価報告書

- 98の長所――国際化に向けた活発なイニシアティブ、研究推進のための積極的な行動、他
- 34の助言――学生による授業評価の全学的システム未整備、ファカルティ・デベロップメントのための努力不足、他
- 改革が必要な欠陥はなし

21

慶應義塾の例(4)

改善のためのフィードバック

- 学部単位の努力――基本手段
- 学生による授業評価の全学的システムおよび大学教育委員会によるFDシステムの確立:34件の助言中9件がこれらに該当。湘南藤沢キャンパス(SFC)の経験に学ぶ(これらについて国内の先駆であり最先端にある)
- 創立150年プロジェクト:今後10年に向けた構造改革プログラム

22

慶應義塾の例(5)

この課程で明らかになったいくつかの弱点

- Multi-versity(マルチバーシティ)シンドローム? : 伝統的な各学部の自律性と大学としての全学的努力の間の葛藤
- 慶應の理念の美点と弱点: 「独立自尊」の精神vs放縦傾向
- 「ブランド大学」の宿命? : 急激に変化する環境の中で「危機感」が欠如

23

慶應義塾の例(6)

- 厳しい競争環境の中で生き残り成長するために、学部と大学本部間での粘り強い協議を通じてこれらの問題を乗り越えることが必要
- 政策策定の基本材料としての評価: どのように「短所」を克服するか、どのように「長所」を伸ばすか
- 「21世紀を主導する大学のモデル」となる決意

24

私立大学の将来に向けて

大学評価

- 市場プレーヤーとして生きるための質評価と透明性
- 強みを明示し、市場に残るために「存在理由」を社会に納得させる貴重な機会
- 市場で強力なプレーヤーとなるための改革の出発点